

特集 龍谷大学 共生のキャンパスづくりシンポジウム ～「仏教SDGs」まごころある人が育つキャンパスづくり～ 報告

02-03 「学生の考える共生」

龍谷大学 経営学部

龍谷大学 社会学部

(株)革靴をはいた猫

おかむら ゆう き
岡村 勇輝

かわむら けい し みず あきら
河村 啓、清水 瞭

うおみ こう た
代表取締役 魚見 航大

04 基調講演 「仏教 SDGs と自省利他」

～学生が光り輝く大学へ～

龍谷大学 学長 いりさわ たかし
入澤 崇

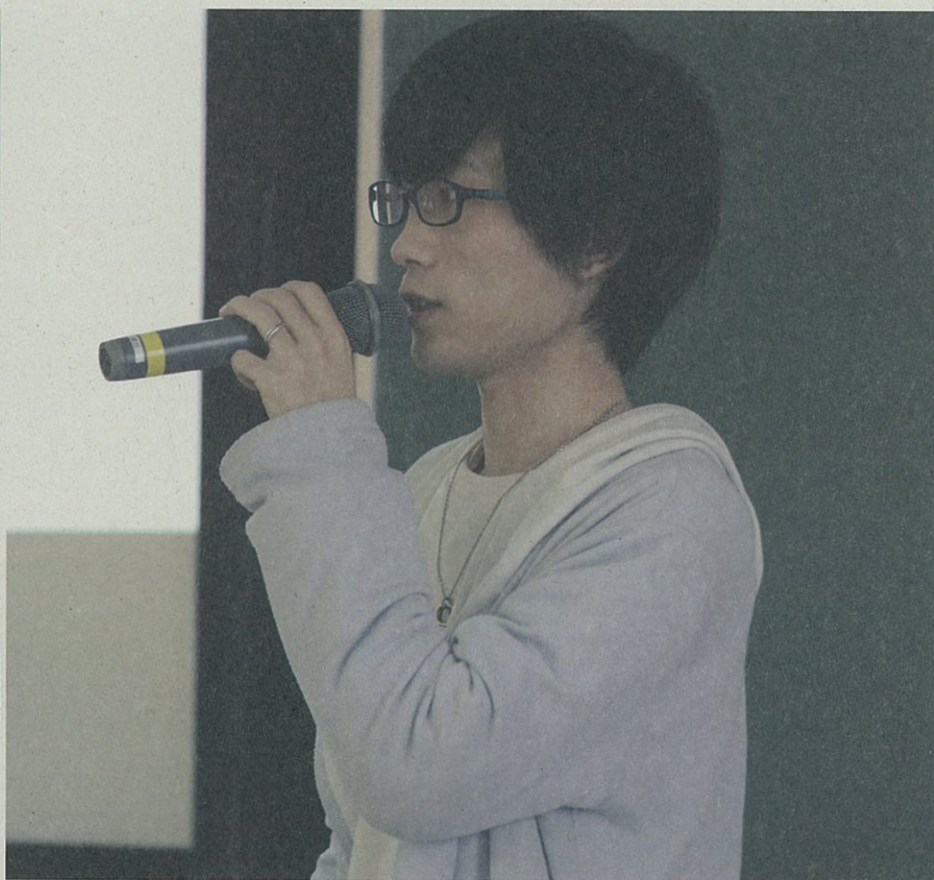
その他、学生の活動紹介など

「ここは『正しさ』を 探す場所ではありません」

2019年11月27日、龍谷大学深草キャンパスにおいて開かれた「第3回 共生のキャンパスづくりシンポジウム」。冒頭のあいさつで、シンポジウムを企画、運営している「障がい学生支援に関心のある学生有志」代表の山崎ゆきあさん(文学部2回生)は、会場にそう呼びかけ、以下のように続けた。

「ここには、学生、教員、職員、学外者、保護者…、様々な立場の人間が座っているが、この空間では、そういった肩書の持つしがらみを見捨て、一人の人間として綺麗ごとなく発言して欲しい」。

共生のキャンパスづくりは、しがらみを超えて「本音」を出し合うところから始まるのではないかな。



「学生の考える共生」学生の本音 その1

障がいがある、ないは、
〇〇〇において関係ない！おかむらゆうき
経営学部2回生の岡村勇輝さんの本音

それは、「障がいがある、ないは〇〇〇においては関係がない」というもの。いったい、何においては関係がないのか。丸の中身は、岡村さんが大学生活の中で見つけた「かけがえのないもの」でした。

不登校の経験

岡村：僕は発達に障がいがあり、小学校のころから約6年間不登校でした。中学2年生の頃より、大阪にあるフリースクールに通い、龍谷大学に入学しました。しかし、入学後しばらくは精神的にとっても辛い状態が続きました。「辛い」といっても、いじめられたわけでもなければ、勉強についていけないわけでもありません。むしろ勉強については、障がいにより書字に時間を要することへの配慮として「パソコン解答」が可能になるなど、手厚いものでした。

その頃、僕が強く感じていたのは「疎外感」でした。どんな「疎外感」かというと、普段、普通に授業を受けていても、「いつか、自分が障がい者だとバレしてしまうんじゃないか」というもので、漠然とした疎外感と恐怖がありました。

そんな時に出会ったのが、学内の「café 樹林」でした。

café 樹林という居場所

ここは普通のcaféではなく、障がいのある人の「就労支援」の場でもあります。僕はアルバイトとしてこの場所で飲食業務をすることになったのですが、そこで働く人たちの姿にとっても驚きました。

というのも、僕が大学に入るまでに経験した障がい者の仕事というのは、「ネジ締め」をすることでした。はっきり言って仕事というよりはただの作業で、1本のネジを締めて1円も入らないような現場でした。おまけに仕事を終えたら、漫画を読むか、テレビを見るばかりの毎日でした。障がいのある人の仕事について、そんなイメージを持っていたから、「café 樹林」の光景は、良い意味で非常にショックでした。みんな笑顔で働いてますし、働く人は本気でプロを追求しています。ここでは、障がい者も健常者も一切関係ありません。仕事をする姿勢、人との付き合い方など様々なことを、毎日一緒に学び経験する場所が「café 樹林」です。

僕は、調理、接客、運営から靴磨きの修行まで、毎日本気で打ち込んでいます。周りの人の仕事に対する姿勢から、僕自身学ぶことが本当に多いです。「樹林」に出会うまで、僕は、「仕事というものは、与えられた業務をこなせば良い」という甘い認識を持っていた。働きながら、真剣に「café 樹林」のことを考えている周



囲の姿を見て、そんな考え方も変わっていきました。

「café 樹林」の面白いところは、「チーム・ノーマライゼーション」という学生団体が、積極的に関わっているところです。僕も、このチームの一員になりました。

チーム・ノーマライゼーション
「与えられる存在から、与え分かち合う存在へ」

このチームには、面白い理念があります。それは「与えられる存在から、与え分かち合う存在へ」というものです。この言葉は、始めは受動的な人でも、人と関わっていく中で誰かに教えるようになるなど行動的になれるという価値観を表しています。これは、本当にその通りで、チームの学生たちは、弱気な僕に密に関わってくれました。一緒にコーヒーを淹れたり、イベントの準備をしたり、話しかけてもらったり、こう言ったらなんですが、感謝してもしきれません。

そして、その中で見えてきたものがありました。それは、自分でどれだけ自分の可能性を開きだしていたのかということでした。「障がいがあるから、できなくても仕方ない」。他人に言われたくないその言葉を、自分が自分に向けていたことに気づいたのです。

それから僕はとても自由になりました。講義も前の席で受けるようになりました。不思議なことに、人の目も気にならず、講義に集中することができるようになったのです。「自分の心持ちと行動しだいで、見える景色がこんなにも変わるのだ」と痛感しました。

良い連鎖を生み出したい

今、僕には一つの目標があります。障がいがあってもなくても、大学で「生きづらさ」を感じている学生は多くいると思います。そういった人たちに本当に必要なものは何か考えました。

例えば人見知りで困っている人が友達にいます。では、あなたはその友達に「人と話さなくても良いよ」と言えますか？忘れがちなのですが、その人にとって楽な言葉がその人のためになる言葉とは限りません。

(株) 革靴をはいた猫

—始まりは、「café 樹林」との出会い—

政策学部卒業生の魚見航大さんが代表取締役を務める「革靴をはいた猫」は、京都市役所前に店を構える靴磨きと靴修理の専門店です。「革靴をはいた猫」のホームページを開くと、そこには、「チーム・ノーマライゼーション」の活動理念が受け継がれていました。

「Change from Taker to Giver」、
「与え、分かち合う存在へ」

シンポジウムでは、魚見代表取締役役にもご登壇いただき、「café 樹林」との出会いや、事業への思いを語っていただきました。

魚見：大学2年生の時「café 樹林」に出会いました。樹林で働く障がいのあるメンバーと話をすることで、彼らが大学生に憧れたり、自分も大学へ行きたかったという思いを持っていたり、自立したい、もっと活躍したいという思いを持っていることに気づかされました。

友達が話すのが苦手であれば、僕たちが話をする練習台になることで、もしかしたらその人の中に人と話す勇気が生まれるかもしれません。その人がどうすれば輝けるのか、それをみんなで考えて、一緒に挑戦していくのがチーム・ノーマライゼーションです。

僕もみんなに助けられた人間なので、この「関係性」をどんどん循環させて「良い連鎖」を生み出していきたいと思います。

イベントを通して人と人とつながる

臨時開催になりますが、「ハンドドリップ・コーヒー」の販売を通じてお客様との会話を楽しむ「コーヒーイベント」を毎年開催しています。コーヒーを淹れる練習や、接客練習をしてから本番に臨むので、貴重な経験になります。僕は、コーヒードリップにすっかりハマってしまいました。他にも、障がい学生支援室に所属している学生に声をかけ、本の内容について語り合う「読書会」を開催しています。こうしたイベントは、人と人をつなげ、交流を生み出します。僕も多くの人と知り合うことができました。

「関係性」において

こうした経験を経て、僕は「障がいがある、ないということとは、人と人との『関係性』において関係ない」ということに気づきました。

「障がいがあるから、守ってあげなければならない」という感覚があるかもしれませんが、「守る」「守られる」という関係ではなく、「人と人との関係性」について、一人ひとりがもう一度じっくり考えることが重要だと思います。



それを聞いた僕の中でも、「一緒に何か挑戦したい」という思いが強くなり、他の学生にも声をかけて活動が始まりました。

活動をする中で、結局「人を笑顔にしたい」という気持ち、人と人との関係性が大事なんじゃないかという考えに至り、そのためには「自ら稼ぐことが大事なんじゃないか」と思い、僕たちが選んだのは「靴磨き」でした。まずは、学生メンバーが大阪の靴磨き専門店で修業をし、そのスキルを持って事業をスタートしまし



た。クオリティで戦っていこうという思いもありましたので、メンバーとは毎日たくさんぶつかりながら、でも人間同士としてつながってやってきました。靴磨きは「心磨き」です。

「居場所」という言葉をよく耳にするようになった。そして『居場所』はあった方が良い」という前提で語られることが多い。

でも、「居場所」ってなんだろう？改めて考えると、「居場所」という言葉から連想する場は、人それぞれ異なっている様に思う。辞書を開くと、「人が住んでいるところ」「いどころ」「その人が心を休めたり、活躍したりできる環境」などとある。では、大学生が考える「大学内の居場所」ってどんな場なんだろう？

シンポジウムでは、3人の学生の発表から、学生が必要だと考えている「大学内の居場所」について議論しました。



社会学部 かわむらけい 河村啓さんの本音

支援室があるという安心感

河村：障がい学生支援室（瀬田）には、たくさんの学生が集まっています。それは、「安心して過ごせる場」を支援室の皆さんが提供してくれているからだと思います。支援室には「受け入れてくれる安心感」があります。中には、「交流したい」という人もいますし、そうではない人もいます。自分の好きなスタイルで過ごさせてくれるのが瀬田の障がい学生支援室です。

分け隔てのない関係

河村：障がい学生支援室には、「支援する/される」という関係ではない「関係性」が生まれています。分け隔てなく関わり合える環境づくりは、「SDGs」にも関係のある話だと思います。人は、「受け入れてくれる」という環境があってこそつながることができると思いますし、「自分がここにいていい」と安心感を得られる場があれば、生きていけるものです。そんな場が増えていけば、もっと皆が生きやすくなると思います。「受け入れる」ということを心掛けることが、皆が生きやすい環境をつくるために必要なことだと思います。



「学生の考える共生」学生の本音 その2

学生が考える大学内にあったらいい「居場所」はこんな場だ



社会学部 しみず あきら 清水瞭さんの本音

ティカーの孤独と利用学生の一言から始まった「タイピング練習&ティカーの交流会」

清水：僕は「パソコンティカー」（聴覚に障がいのある学生の情報保障として、講義情報を文字で伝える）をしています。ティカーって、交流する場がなければすごく孤独なんです。授業中ティクをするのですが、自分が履修している授業ではないということもあり、誰とも交流することもなくその授業は終わってしまふ。僕は一人で自主的にタイピングの練習をしていて、でも「他のティカーさんはどうしてるんだろう？」と思っていました。

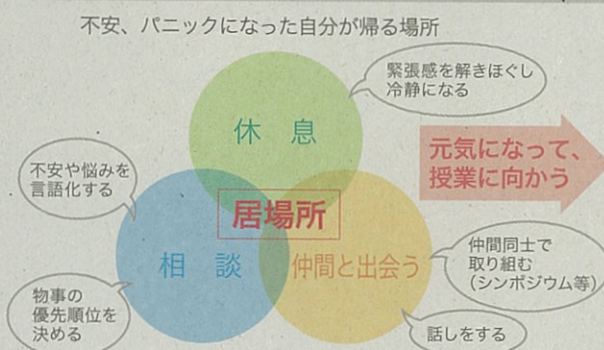
そんな中、ある日、ティクの利用学生から「ティカーによってレベルの差がありすぎる」と言われはっとしました。ティカーは、アルバイトとはいえ仕事ですよね。これまでの経験によりスキルの違いがあるのは仕方ないことではありますが、同じ給料をもらっているのに、ティカーによっては利用学生に迷惑をかけてしまうのはとても失礼なことだと思いました。そこで、障がい学生支援室の職員さんへ「ティクの練習の機会をつくれなにか」と相談をし、その様な場を持つことになりました。集まってみると、他のティカーも同じ悩みを抱えていました。今では、定期的集まり、タイピング練習をしています。集まって悩みを共有すること、そして仲良くなる場って、本当に大切だと思います。

学生の考える「大学内の居場所」

瀧本（障がい学生支援室コーディネーター）：岡村さん、河村さん、清水さんの発表と、昨年度のシンポジウムの益田さんの発表などを振り返りながら、学生が考える「大学内の居場所」について、意見交換したいと思います。

まず、昨年益田さんが作成した図を基にして作成した「学生発 大学内の『居場所』の機能」をご覧ください。

学生発 大学内の「居場所」の機能



この図では、学生が不安になったり、気が動転したりした時に戻れる避難場所であり、休息し、様々な困りごとをコーディネーターに相談し解決を図る。そして仲間にも会える場、これを「居場所」と定義しています。何より重要なのは、「休息」「相談」「仲間」により、「元気」が出てくる。つまりパワーが復活し、様々な障壁のある大学環境へ再び戻っていくことができるという点です。この図の「居場所」は、河村君の発表にあった「自分がここにいていい」と思える場、安心できる場というのに近いと思いますが、いかがでしょうか？

河村：この図で「相談」と「仲間」が重要だと思いました。私にとっても「仲間」との出会いが大きかった。「相談」も大切だけれど、仲間の中で自然な形で困っていることとか、友達ができなくて大学に行きにくい話とか、そんな



な話ができると良いと思います。

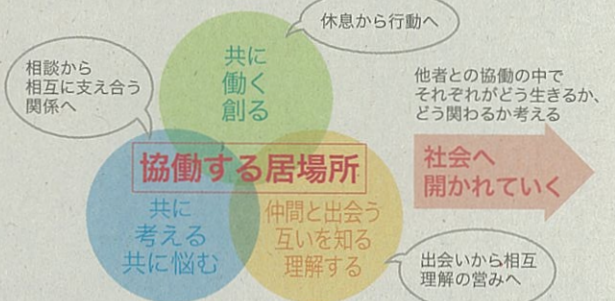
瀧本：こういった「居場所」と岡村さんが発表した「café 樹林」、または「チーム・ノーマライゼーション」の「居場所」は少し異なると思うのですが、いかがでしょうか？

岡村：僕が大事にしている「関係性」は、「成長」がキーワードだと思います。本人たちにとって心地よくても、本人たちが全く成長しない関係性だったとすると、それはどうなんだろう？と僕は思います。僕は、最終的に一人ひとりが成長していけることがゴールだと思います。今日なぜ発表しているかと言うと、今しんどい思いを持っている人たちに会って友達になりたいと思ったからです。出会うことがその人にとっても、僕にとっても成長につながる。照れくさいですけど、そんな思いがあって今日ここに来ています。この気持ちは、外に発した気持ち。内に向かうのではなく、外に向かう気持ちが、成長の面では重要だと思います。

魚見：僕はメンバーと向き合って、本人の「チャレンジしたい」という気持ちに寄り添ってきたかな。そんな活動をする中で、自分自身も引っ張られるところがあって、変わってきた部分があると思います。共通の目的を持って、一緒に行動するということが、居場所をつくると思います。ティカー同士の交流もそうだと思いますが、そこがすごく面白い。創っていく面白さがあると思います。

「チーム・ノーマライゼーション」の取組から考える共に育ちあう「居場所」

いつでも自分が帰れる場所



瀧本：「チーム・ノーマライゼーション」の取組は、目的を定めた他者との「協働」の中で、一人ひとりがどう生きるか、どの様に関わり合っていくかということが問われる作業。その中で「成長」の実感もあるし、「創造」の喜びもある。障がい学生支援室の居場所が、授業へ向かうためのエネルギー補給の場とするならば、樹林は社会へ開かれていく場だという違いもありますね。どちらが正しいということではなく、多様な学生の状況に応じた場が必要であるということだと思います。そして大人が勝手に居場所を準備するのではなく、学生達が主体的に創っていくプロセスが重要だと思いました。ありがとうございました。

基調講演

仏教SDGsと自省利他
——学生が光り輝く大学へ——

龍谷大学 学長 入澤 崇

仏教SDGsとは

SDGs(Sustainable Development Goals = 持続可能な開発目標)とは、2015年に国連サミットで定められた世界共通の目標のことです。貧困をなくそう、飢餓をゼロに、質の高い教育をみんなに、といった17の目標が掲げられています。これを2030年までに実現しようということで、今、各国や企業が取り組みを進めており、龍谷大学も本格的に参画するということで取り組みを開始しました。SDGsの話聞いたときに、龍谷大学としても積極的に取り組むべきだと思いました。SDGsの宣言は、「誰一人取り残さない」ということを謳っています。その言葉は、本学が建学の精神としている浄土真宗の精神に通じるものだと考えました。と、言いますのも、浄土真宗の中枢にある阿弥陀仏のはたらきを示す語に「摂取不捨(すべての者をおさめとて見捨てない)」という言葉があるのです。SDGsは、地球の危機を見据えた国連の方から、「誰一人取り残さない」と提案してきました。私は、建学の精神を基盤に据えたSDGsを構想できないかと考えたのです。今回、龍谷大学がSDGsに取り組むにあたって、「仏教SDGs」と名付けました。各種仏教団体や仏教系大学との連携も視野に入れています。SDGsは、このままでは地球社会が危機的状況になるという強い危機感が出発点です。とりわけ、今、地球温暖化や気候変動が起きていることはみなさんも実感していると思います。

グretaさんの活動

グレタ・トゥンベリさんという、スウェーデンの16歳の少女をご存知でしょうか。彼女は非常に気候変動の問題に敏感で、それを食い止めるための行動が足りないと、国連で世界の首脳に向けて呼びかけました。その後、彼女に対して、反対意見や批判が多数出ました。ですが私は、彼女の発言を支持します。彼女が言ったことは、ずばり現代社会の問題を指摘してくれていると思います。学生にとって大切なことといえば単位を取って卒業・就職することだと、多くの人はそう思っていることでしょう。しかし、今、本当に大切なことは、「社会に大きく目を見開くこと」ではないでしょうか。私たちが勉強・仕事をする「場」が危機に瀕しているという自覚を私たちは持つ必要があります。社会が大きく変動しているということを直視しなければなりません。

私たち人間は、基本的に自分の利益を追求する動物です。過度な自己利益追求やとどまることを知らない自己中心性が地球に危機的状況をもたらしています。私たちはこの世の中をたった一人で生きているわけではありません。他者との関係の中で生きています。学生諸君は必修科目「仏教の思想」で、私たちは「生かされている存在だ」、「縁の中で生きている」と習ったはずで

他者との関係性に重きを置くことが痛切に求められています。「共に生きる」ことを皆が自覚せねばなりません。例えば困っている人がいたら、すぐ手を差し伸べることは、いろいろな行動に結びつくと思います。

龍谷大学の活動

今、実際に龍谷大学で他者との関係性に重きをおいているグループがいくつかあります。「ボランティア・NPO活動センター」は、東日本大震災や西日本豪雨といった災害でボランティア活動に従事されました。また、「チーム・ノーマライゼーション」やそこから誕生した「革靴をはいた猫」もあります。革靴をはいた猫は、障がいのある学生の就労支援に始まり、靴磨きをひとつの事業として行っている会社で、一般学生が障がいのある学生とともに起業した例です。それから、学生が事業を立ち上げた例として、タイの少数民族が作るコーヒー豆の販売をするチームも生まれています。また、食品ロスの問題に取り組む学生諸君も現れています。私はこれらが、すべてSDGsの中に落とし込める題材ばかりだと思っています。1年生の必修科目に仏教があり、そこで慈悲や利他について学びます。そうした学生諸君が社会的課題に取り組んでいます。こういう輪が広がっていけば、私は世の中がどんどん変わっていくと思っています。

自省利他

今年、龍谷大学は創立380周年を迎えました。380周年を迎えたとき、「自省利他」ということを掲げました。これは、さっきのSDGsの話に繋がります。社会問題、紛争問題だったりいじめの問題だったり、地球環境の問題はすべて「人間」が起こしています。このことから、私たちはこのままで良いのかと自分自身を省みる必要があると、強く思いました。「自省」というのは自らの在り方を省み、自分には自己中心性・利己性が宿っていることを自覚し、絶えずその払拭に努めることです。また「利他」とは、他者に対して思いやりを発動すること、他者の幸福を願っての行動のことをいいます。ここで「自省利他」といった場合、「自」「他」という字があります。問題になるのは「自己」と「他者」です。例えば家の中で引きこもるというのは他者との縁を断ち切ることで、自分さえ良ければいいということです。ですが、私たちは他者との関係の中で成り立っている存在です。つまり、他者とともに生きているということが基本にあります。引きこもっている人はそのことに気が付きません。そのことによって自分で自分の首を絞めるかのように悩みを生じさせています。このようなケースが非常に多いのです。私は、この世の中で生きていくことについて、自己と他者という関係性をどのように見ていくのかが、大きな鍵になると考えています。

仏教の中には、「衆生」という発想があります。これは、「一切衆生」ともいい、「すべてのいのちあるもの」の意味を持ちます。性別・年齢・障がいの有無などが問題とならず、共にいのちあるものという視点で見ていく。私は、この「衆生」という視点で物事を見ることが大事だと思います。龍谷大学のチャイムでは、「菩薩が行う



べき4つの広大な誓い」に曲をつけたものを流しています。その第一が、「衆生無辺誓願度」です。これは、「生きとし生けるものすべてを、誓って覚りの岸に渡そう」という意味です。このように、衆生というのが最初に来ます。この菩薩の姿勢は、自分の幸せを優先するのではなく、衆生の救済、つまり「誰一人取り残さない」ことを目指すのです。仏教は十分、現代に通じる発想です。

真の障がいは、社会的障壁

ここで、障がい者支援の重要な視点について示します。障がいの有無を超えて、すべての人々が共生する社会の構築を考える必要があります。真の障がいとは何でしょうか。それは、障がい者の方が直面している社会の障壁ではないでしょうか。個々人の障がいは、もちろん直視しなければいけないものです。しかし、問題にすべきは何かというと、社会の障壁です。恐ろしいのは「無関心」であることです。学内で困っている人がいても、その人に対して全く無関心でいることは非常に恐ろしいことです。社会においても同様です。心と心が通い合う社会を早急に構築しなければならないものだと強く思っています。

最後に、本学の学生の言葉を紹介。瀬田学舎で創設30周年記念のシンポジウムを開催したときに、ある学生が「SDGsとは何のためですか？」と問いかけました。「SDGsは、自分たちの取り組みをアピールすることが目的なのですか？」と。彼女は、「私たち一人ひとりの行動や意識が変わることこそが大事なのではないか」と提言しました。私は、彼女の言葉に強く賛意を表したいと思います。大学は学生が学ぶところですが、今の学生の発言から、私たち教職員が「学生に学ぶ」ということも必要であるといえます。

一人ひとり、みんな「いのちを抱えている」という点で平等です。そのいのちは光り輝くものなのです。どうか、皆さん一人ひとりが社会に繋がる学びをぜひとも習得し、周囲を輝かせる存在になっていただければと思います。



【写真】左：京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォームによる支援機器の展示、中左：ボランティア・NPO活動センターの学生によるボランティアに関する展示
中右：手話サークル「LEMON」の発表、右：大宮学舎障がい学生支援室の紹介を手話で行う学生

障がい学生支援室より

龍谷大学には、障がいのある学生が271名(2019年度現在)在籍しています。「障がい学生支援室」では、学生が授業を受けるにあたり障壁となっていること、学生生活において困っていることなどに心を寄せながら、学生と共に、また教職員と共に学内の障壁を明らかにし、多様な学生が学習しやすい環境づくりを目指して様々な事業に取り組んでいます。「共生社会」とは、人間社会に存在するあらゆる壁を超えて、誰もが相互の人格を尊重し、自然への配慮を忘れず、多様な人のあり方を認め合う社会です。「共生のキャンパスづくり」は、これからも続きます。



編集後記：「第3回共生のキャンパスづくりシンポジウム」には、学生、教職員、学外からの参加の方々も含め多くの参加がありました。誌面の関係で省略せざるを得ませんでしたが、積極的な意見交換がなされていました。「正しさを探すのではなく、一人の人間として綺麗ごとなく発言できる場」が「共生のキャンパスづくり」には欠かせないと思いました。